

平成29年度 図画工作部会研究計画

1 研究主題

豊かにかかわり つながり 自らつくりだす造形活動

－ 自分の思いを大切に、つくりだす喜びを味わうことができる授業づくり －

2 研究主題設定にあたって

図画工作科では、「こんなふうに描きたいな」「こういうものをつくりたい」という思いや願いをもって、夢中になってもものづくりに取り組む子供たちの姿が見られる。その際、私たちが留意しておきたいことは、描いたりつくったりする活動をしていれば、全ての子供が主体的に学んでいるように見えてしまうということである。指導者は、子供たちが楽しそうにクレヨンで描いたり、粘土を使って活動したりしている姿の中から、本当に自分のつくりたい思いを大切に、感性を働かせて活動しているのか、何度も試しながら自分の思いを表現しようとしているのかを丁寧に見取っていかなければならない。つまり、図画工作科においては、「自らつくりだす」という主体的な子供の育成を目指し、指導計画や指導方法の改善、評価の在り方等を、今まで取り組んできた造形活動の成果を踏まえ、より一層研究していく必要がある。

図画工作部会は、平成26年度から「かかわり つながり 自らつくりだす造形活動」の主題を掲げ、ものをつくる活動における学びの過程を丹念に見直してきた。また、子供が「表現内容」、「表現材料」、「表現方法」に主体的にかかわり、表現や鑑賞の活動を通して友達や周りの人々と互いの思いを交流し合い、「ひと」「もの」「こと」につながっていく楽しさを実感できる指導方法の工夫・改善に取り組んできた。さらに、表現と鑑賞の関連を図った授業づくりに重点を置き、「つくる」ことと「見て感じる」ことが相互に関連して働き、形や色などの感じやイメージしたことを基に自らが思考・判断し、「表現内容」、「表現材料」、「表現方法」を自己決定することができるような授業展開や場の設定を工夫してきた。その結果、「自分の表したいことをどうやって表そうかと考え、主体的に材料や用具とかかわりながら自己決定していく」子供の姿や、「互いのよさを認め合うことで自分の表現に自信をもち、更なる表現への意欲をもつ」子供の姿が多く見られるようになった。

平成28年度は、これまでの「かかわり」「つながり」「自らつくりだす」から得られた研究成果を生かし、図画工作部会の課題である「自分の表したいことを創造的な技能を働かせて、主体的に表現しようとする子供の育成」に取り組んだ。その結果、子供たちが自分の思いを大切に題材とかかわり、表現や鑑賞の過程を通して「ひと」「もの」「こと」へとつながることで、主体的に造形活動に取り組もうとする態度を育てることができると実感した。同時に、指導者は、子供たちが思いを実現するために、子供の思いと指導者のねらい、既習の「知識・技能」や「表現と鑑賞を支える仲間づくり」等が一体となって働くような授業をつくっていくことが重要であると考えた。そこで、本主題を「豊かにかかわり つながり 自らつくりだす造形活動」、副主題を「自分の思いを大切に、つくりだす喜びを味わうことができる授業づくり」とし、研究の方向性や具体的な改善策を明らかにし、図画工作科の指導の工夫・改善を図っていく。

3 研究主題についての考え方

(1) 「豊かにかかわり」

これまで、図画工作部会では、造形活動において、「表現内容」(何を)、「表現材料」(何で)、「表現方法」(どのように)といった3つの要素を明確にした授業づくりに取り組んできた。表現活動では、子供が、この3つの要素をしっかりとつかむことにより、自らつくりだす活動が促されると考える。自分の表したいことが決まっている子供は、主体的に製作に取り組む。また、表したいことがはっきりしていると、何を使って表すのかということにも積極的にかかわっていくようになる。鑑賞活動では、3つの要素を基に友達や自分の作品を見ることで、自分なりの考えをもったり、感じ取ったりしやすくなる。そのとき感じた思いや願いは、自分の表現活動を広げたり深めたりすることにもつながる。

大切なことは、子供自身が3つの要素と「かかわり」、自分の思いを大切に、表現や鑑賞の活動に取り組むことができるようになるかである。例えば、活動や作品を観察すると、あらかじめ材料が用意さ

れているので安易に使ったと見受けられたり、材料を選んだ子供の思いが伝わってこないと感じたりしたことはないだろうか。もし、子供が自分の思いを大切に材料を選んでいけば、表現された作品からそれは伝わってくるはずである。材料は、子供の表したいことと相まって「表現材料になる」のである。また、「表現内容」と子供とのかかわりによって「材料になる」場合もあれば、「材料」から何を表したいのかが明確になる場合もある。そして、子供はつくりながら、自分の思いに合う「表現方法」を見つけていく。表したいことに向かって、材料を変えてみたり、ぬり方や色を変えてみたりと、「つくる」中で「つくりかえる」が生まれる。つまり、授業づくりにおいては、この3つの要素とのかかわりを明確にするだけでなく、その根幹には、子供の表現の欲求が不可欠だということである。指導者が、子供の「自分はこう表したい。」という表現の欲求を大切にすることで、子供は「表現内容」(何を)、「表現材料」(何で)、「表現方法」(どのように)とより豊かにかかわることができる。

(2) 「つながり」

「この形いいね。」「すごいね、どうやってつくったの。」活動中に交わされる子供たちの声。そこには自分の表現を認めてくれる言葉に自信をもち、どんどん活動に熱中していく姿がある。このような子供同士の中で認められる体験が、表現への意欲を高め合うことにつながる。幼稚園の子供たちを招待して一緒に活動したり、できあがった作品を地域イベント会場に展示したりするなど、作品や活動を介して周りの人たちと交流をもつ場合も同様である。そこで寄せられる共感や賞賛の言葉から、更に子供たちは表現することへの喜びを実感することができるであろう。

このように、子供たちが表現や鑑賞の活動を通して交流し、互いの表現の違いやよさを認め合うことで、表現することの楽しさやすばらしさを体感できる活動も重視したい。子供たちが自分の思いを大切に表現や鑑賞の活動を実現することで、自分の思いが周りの「ひと」「もの」「こと」へとつながっていく。その際、「話したり、聞いたりする」「話し合ったりする」などの場を適切に位置付け、言語活動の充実を図っていく。また、表現や鑑賞の活動では、「ひと」「もの」「こと」とつなげていく場を設定することで、「思った通りにできた」「思いをうまく伝えられた」「つくって喜んでくれた」などといった達成感や自己肯定感が高まり、造形の喜びを味わうことができる。学びの喜びを実感させることが、主体的に表現や鑑賞の活動へ取り組む意欲を生み、次の活動へと結び付くことになる。

(3) 「自らつくりだす造形活動」

「自らつくりだす造形活動」とは、表現と鑑賞の活動において、子供たちが形や色などから感じたことを基に自ら働きかけ、自分で新たな意味や価値を主体的につくりだす創造的な活動である。例えば、地面や身近にある紙などに線や形を描いて、描き出された形から意味付けたり、身近な材料の組み合わせ方を試しながら、形や色、イメージに合った組み立て方を工夫してつくりだしたりすることなどである。ここでは、見たり感じたりする力、どのような形にするかを考える力、表現するために材料や用具を選ぶ力、表現方法を自ら工夫する力などが働いている。そして、何よりつくりだす喜びを味わっている。このように造形活動においては、子供たち自身の造形的な資質や能力が強く発揮され、自らが思考・判断し、自己決定をしていくようにすることが大切である。

表現と鑑賞の活動においては、「子供たちが形や色などから感じたことを基に、思考・判断、自己決定を繰り返すことができる学習過程をどうすればよいか」、「自分の感覚や感じ方、表現への思いなど自分の感性を十分に働かせることで自分らしい造形活動をつくりだしていくにはどうすればよいか」などについて解明していく必要がある。

(4) 「自分の思いを大切に、つくりだす喜びを味わうことができる授業づくり」

生育環境も生活経験も一人一人違う子供たちは、題材を前にして様々な受け止め方をする。「描きたい、つくりたい」という思いにあふれた子供もいれば、自分の活動や作品に低い自己評価をもち、つくすることに抵抗を感じている子供もいる。そこで、指導者は参考作品を用意したり作品提示の仕方を工夫したりするなど、子供と「表現内容」、「表現材料」、「表現方法」との出会いを大切に、工夫する必要がある。指導者が、一人一人の子供の実態を踏まえ、3つの要素と豊かにかかわらせる(子供たちは自らかかわっていると感じている)ことで、子供たちは自分の思いを明確にし、その思いを実現しようと主体的に取り組んでいこう。そのために、活動時には、表現方法や手順についての見通しがもてるようにアイデアスケッチをさせたり、板書や掲示などを工夫したりする。

活動中の子供は、自分の思いと表現活動を照らし合わせながら課題を発見する。そのとき、これまで身に付けてきた知識や技能を駆使して表現しようとしたり、新しい技法や仕組みを意欲的に学ぼうとしたり

する。何度も試しながら自分の思いに合う表現方法を考えることで、豊かな表現を生み出していく。しかし、全ての子供が「つくりたい」という思いからスタートしても、作品完成までの道のりはスムーズに行くことばかりではない。指導者が表現と鑑賞の関連を図った授業づくりをすることで、子供は「友達の活動」や「作品のよさや面白さ」を感じ取り、自分と違った発想や表現の工夫に気付いていく。そして、自分の表現の幅を広げたり自分の表現に生かしたりして、表現の質が高まっていく。このような過程を通して、子供は自分の思いや表現に自信を深め、つくりだす喜びを味わうことができる。

4 研究内容

(1) 発達の段階や系統性を踏まえた指導計画の作成

指導事項や〔共通事項〕を考慮し、各学年で指導すべき内容や事項を踏まえ、題材の焦点化や題材の配列の工夫、適正な評価を考慮し指導計画を作成する。その際、子供の学習意欲を高めるために発達段階に応じて、系統性を踏まえた学びが展開できるように工夫する。また、地域の実情や子供の発達段階に即した適切な題材の設定、各教科等との関連を意識した題材の設定を行うことも大切である。

指導計画の作成の際には、「A表現（1）材料を基に造形遊びをする活動」と「A表現（2）表したいことを絵や立体、工作に表す活動」のバランスや〔共通事項〕の視点から指導計画や内容、方法を検討し、目標を設定し、具体的な指導と評価を考えることにも留意していきたい。

これまでの研究において、子供の発達段階に応じて、幼稚園、小学校、中学校の内容の連続性に配慮することも「つながり」ととらえ、育成する資質や能力と学習内容との関係を明確にし、年間指導計画や題材設定、指導方法等を工夫してきた。今後も、学びの連続性を踏まえた系統的な指導を重視する。

(2) 自らつくりだす子供の姿を実現するための授業づくり

子供たちが、自分らしい発想で、自分なりの方法で夢中になって自己表現できるためには、指導者だけでなく「学級の誰もが自分の表現を受け容れてくれる」という信頼感、安心感が必要になる。そこではじめて、互いの表現の違いをよさとして認め、自分が気付かなかったことに気付かせてくれたり分からないことを教え合ったりできる仲間として尊重し、学び合う関係が生まれる。その学び合いの中で、子供は自分の思いや表現に自信を深め、自らつくりだそうとする。つくりだす喜びを体感した子供は、自ら「かわり」、「つながり」、何度も自分の思いを表現する方法を試み、最も適切な表現方法を選び、再びつくりだしていく。このような自らつくりだす造形活動を展開するための授業づくりの留意点を次の事項としてとらえる。

○ 感性を働かせ、表したいことへの思いや考えをもたせるための授業づくり

まず、表現の活動では、表したいことを思い付いたり表し方を考えたりすることができる指導を、鑑賞の活動では、よさや美しさを感じ取ることができる指導を充実する。例えば指導者が表すことや表し方、感じ取る内容などを示し、それをなぞらせるような授業では子供たちは思いをもつことはできないだろう。一人一人の子供が感覚や感性を働かせながら、つくりだす喜びを味わい、造形的な創造活動の基礎的な能力を発揮することができる授業を設定することが大切である。そして子供は、ものをつくりながら感性を働かせ、製作の過程や作品などから、よさや面白さ、美しさを感じ取り、ものの見方を深めていく。そこで、それぞれの子供が、自分の感じ方を大切にするような手立てや自らの造形活動を見通したり振り返ったりする場の設定などが重要である。

○ 表したいことを支えるための授業づくり

子供は、何度も表現方法を試し、自分の思いに合う表現方法を選び、作品製作につなげていく。子供が安心して、試したりつくり直したりできる学習の場を用意することが大切である。つくりながら、考えが変わったり、それに伴って計画が変わったりしていくことも大切な学びであるということを考慮し、子供が構想を練り、計画を立てる楽しさを味わえるように学習過程を工夫する。また、表現に応える材料・用具の使い方や技法の指導も適切に行っていきたい。

○ 自らつくりだす喜びをもたせるための授業づくり

つまずきや様々な出来事を乗り越えてつくることで、子供は達成感を得る。その達成感が「自分は、いろいろな方法を試して、がんばることができる。」とか「何があっても、自分だったらなんとかできるかもしれない。」などといった自己肯定感につながる。このようにして得られた達成感や自己肯定感によって子供は自分の存在を感じ、自らの感性を働かせ、つくりだす喜びを味わうことができる。そのために、子供の活動の様子をよく見ることを繰り返し、子供の心情を読み取りながら活動を観察する。じっとして

いて活動が停滞しているように見えても、立ち止まって次の活動を自分で見付けようとしている状態のときもある。今、目の前にいる子供がどのような状態なのか、これまでの様子と照らし合わせるなどしながら、見極め、指導することが重要になる。

また、鑑賞活動では、友達同士互いの見方や感じ方の違いを楽しんだり、表現における互いの表し方の違いやよさを認め合ったりできる場を工夫する。自分の見方や感じ方、表し方に対する自信をもち、更なる表現への意欲をもてるように言語活動の充実を図る。

(3) 指導に生きる評価の工夫

指導と評価の一体化を一層進めていく。子供一人一人が表現活動の中で、どのような力を発揮しているのかを見取り、一人一人のよさを認め、子供たちに表現への自信と喜びを味わわせ、更なる表現への意欲をもたせることが大切である。作品という結果だけでなく、その過程に目を向け、育てたい資質や能力の発揮状況を適切に評価し、共感と支援を行い、子供一人一人の造形活動への意欲、資質や能力を高める指導につなげていくことが重要となる。

評価の進め方については次の事項に留意する。

- ①各学年で育成する資質や能力、学習内容、子供の実態を考慮し題材の目標を設定する。
- ②設定した目標について〔共通事項〕の視点から各観点の評価規準を設定する。
- ③評価規準を「指導と評価の計画」に位置付ける。
- ④評価方法や評価資料を明確にする。
- ⑤造形への関心・意欲・態度、発想や構想の能力、創造的な技能、鑑賞の能力の観点ごとに評価する。

また、子供自身が自らの学びを振り返って次の学びへ向かうことができるように、自他の作品や取組のよさについて記述したり、話し合ったりする自己評価や相互評価等を用いた場を設定する。さらに、子供自身が自らの学びを実感できるように、子供の表現や思考を具体的に見取る評価や学習の過程における一人一人の学びの評価の仕方を工夫したり、ポートフォリオ、デジタル記録やワークシートなど多様な評価方法を活用したりすることなど、指導に生きる評価へと取り組んでいきたい。

5 研究方法

- (1) 本年度は研究大会の会場校である石井町浦庄小学校を中心とする研究組織をつくり研究計画を立てる。また、発表担当の各都市の研究組織と協働しながら事前研究や授業実践を行い研究内容の解を図る。

浦庄小学校では、1～6学年の授業公開と分科会を実施する。

低学年分科会	<ul style="list-style-type: none"> ○ 豊かな発想をし、体全体の感覚や技能などを働かせ、自らつくりだす喜びを味わうようにするにはどうすればよいか。 ○ 身の回りの作品などから、面白さや楽しさを感じ取ることができるようにするにはどうすればよいか。
中学年分科会	<ul style="list-style-type: none"> ○ 豊かな発想をし、手や体全体を十分に働かせ、表し方を工夫して、自らつくりだす喜びを味わうようにするにはどうすればよいか。 ○ 身近にある作品などから、よさや面白さを感じ取ることができるようにするにはどうすればよいか。
高学年分科会	<ul style="list-style-type: none"> ○ 想像力を働かせて発想や構想をし、様々な表し方を工夫して、自らつくりだす喜びを味わうようにするにはどうすればよいか。 ○ 親しみのある作品などから、よさや美しさを感じ取ることができるようにするにはどうすればよいか。

- (2) 各都市研究会は、研究主題の解明に向けて共通理解を図り、研究や授業実践を行う。

- (3) 研究成果をまとめ、研究集録（第54集）を発刊する。